

観念論から実在論へ

——世紀転換期アメリカ哲学史 (1) ——

From Idealisms to Realisms

大 阪 大 学

要 旨

米国における専門職的な哲学は、世紀転換期に観念論から実在論へとその基調を変えた。両派のあいだで問題となっていたのは、認識対象の存在論的身分および認識関係の特性をどのようなものとして捉えるべきかという点である。観念論は、認識関係を対象にとって本質的なものと見なし、精神によって知られることで対象が存在しうると考えた。他方で実在論は、対象にとって認識関係はあくまで偶然的なものであり、対象自体は精神から独立して存在すると主張した。本論文では、これまでほとんど注目されてこなかった双方の主要な特徴を明らかにしたうえで、古典的プラグマティズムの実在観をそのなかに位置づける。あわせて、当時の哲学が置かれた知的状況についても言及する。

キーワード

アメリカ哲学、観念論、実在論、プラグマティズム

1. 主 題

本論文の目的は、第一に、観念論から実在論へという思潮の推移に注目することで、わが国ではほとんど知られてこなかった19世紀末から20世紀初頭のアメリカ哲学の状況を描き出すことであり、第二に、そうした状況における古典的プラグマティズムの位置づけを探ることである。

南北戦争（1861-65）以後、米国の専門職的な哲学者のあいだでは観念論が支配的だった。これに対して、19世紀後半にプラグマティズムが観念論

批判の先鞭をつけた。20世紀に入ると実在論的な思潮が興隆し、観念論を激しく攻撃した。こうしてアメリカ哲学は実在論的な方向へと大きく舵を切ることになった (Schneider [1963], Kuklick [2001] chaps. 6-11, De Waal [2001], Campbell [2006], Tunstall [2014])。

この時期のアメリカ哲学の動きを、本論文で扱う著作を中心にまとめると、以下ようになる (○, ●, ☆はそれぞれ、実在論的、観念論的、プラグマティズム的動向を表す)。

- ☆1878 パース「私たちの観念を明晰にする方法」
- 1887 デューイ『心理学』
- 1897 ボウン『思考および知識の理論』
- ☆1898 ジェイムズ「哲学的概念と実際の帰結」
- 1898 ボウン『形而上学』改訂版
- 1900-1901 ロイス『世界と個』
- 1901 ハウイソン『進化の限界』
- 1902 新実在論者によるロイス批判 (Perry [1902], Montague [1902])
- ☆1903 デューイらシカゴ・プラグマティストによる『論理学研究』
- 1906 オーモンド『哲学の概念』
- ☆1907 ジェイムズ『プラグマティズム』
- 1910 ベリーによる観念論批判 (Perry [1910a], [1910b], [1910c]), ホルトら「綱領」論文
- 1912 ベリー『現在の哲学的諸傾向』, ホルトら『新実在論』, ジェイムズ『徹底した経験論論集』(死後出版)
- 1914 ホルト『意識の概念』
- ☆1916 デューイ『実験論理学論集』
- 1917 クレイトン「観念論の二つの型」
- 1918 スポールディング『新合理論』

●1919 ロイス『現代観念論講義』（死後出版）

○1920 ドレイクラ『批判的実在論論集』

この年表で確認したいのは、第一に、パース、ジェイムズ、デューイといった古典的プラグマティストの活動が、観念論と実在論の角逐と時を同じくしていること、第二に、1910年が転換点だということである。というのも、この年に発表された新実在論者による諸論文は、観念論への批判を本格化させたからである¹⁾。

ところが、この時期の観念論および実在論の内実については十分に知られてこなかった²⁾。ジェイムズ (William James, 1842-1910) が観念論を徹底的に批判し、また初期のデューイ (John Dewey, 1859-1952) がヘーゲル的な観念論の強い影響下にあったことは周知の事実だが、では、ここで言われる観念論とはいかなる立場なのか、どのような人物が中心となり、どのような哲学的問題をめぐってどのような議論がなされたのかについては解明されるべき点が多く残っている。また、古典的プラグマティズムがどのような思想的土壌のなかで形成されたのかという点についても、いまだ定説が確立していない³⁾。

こうした事情を踏まえ、本論文では、観念論から実在論への移行という観点から世紀転換期のアメリカ哲学という豊かな土壌を掘り起こし、従来のアメリカ哲学史像の刷新に寄与することを目指す。

2. 世紀転換期の観念論

世紀転換期——より具体的には南北戦争の終結から第一次世界大戦までの時期——の米国では、英国スコットランド学派の影響を受けた従来の哲学⁴⁾に代わって、カントやヘーゲルといったドイツ哲学の影響のもとで多彩な観念論が展開された (Thilly [1914] 549, Perry [1930] 189, Montague [1940]

231, Campbell [2006] ch. 6)。こうした観念論的哲学の浸透は「観念論へのコンセンサス」とも呼ばれる (Kuklick [2001] ch. 7)。

この時期の観念論には、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) に代表されるトランセンデタリズムや、*Journal of Speculative Philosophy* を立ち上げたブロックマイヤー (Henry Conrad Brokmeyer, 1828-1906)、ハリス (William Torrey Harris, 1835-1909) たちのセントルイス・ヘーゲル主義も含まれるが、本論文では、のちの实在論的運動のなかで批判の矢面に立つことになる、大学の専門職的哲学者の観念論に焦点を絞る。

2-1. 人 物

観念論者は19世紀後半の米国の大学において主要なポストを占め、当時の哲学界で大きな影響力を持っていた。実際、APA (American Philosophical Association) や WPA (Western Philosophical Association) といった学会の初期の会長と会員の多くが観念論者であった (Campbell [2006] 296-99)。

この時期、米国に複数の研究大学が登場するにつれ、哲学は従来のあり方——カレッジの学長が上級生向けの「道徳哲学」と題された授業で教える科目——から、論理学、形而上学、倫理学といった主要分野を教える資格を持つ専門職を養成するための独立した学科へと変貌した。こうした大学において、ドイツ哲学の影響を受けた観念論者はカリキュラム作成や大学の運営に携わった。また、彼らは専門ジャーナルの創刊や編集にも関わった。こうして、観念論者は哲学を、勃興しつつある近代的大学のなかに「諸科学の科学」として位置づけることに成功した (Sabine [1917], Schneider [1963] 375-76, Campbell [2006] 105-107, Tunstall [2014] 34)。

この時期を代表する観念論者として、シリー (Frank Thilly, 1865-1934) ——コーネル大学で教え、WPA 初代会長も務めた、当時の中心的哲学者のひとり——は20名を挙げ (Thilly [1914] 549, 562)⁵⁾、また現代の思想家で

あるククリックは9名を紹介している (Kuklick [2001] 111-15, 邦訳161-66)⁶⁾。本論文では、そのうちの4名——ハウィソン⁷⁾、ボウン⁸⁾、オーモンド⁹⁾、クレイトン¹⁰⁾——を主に取り上げる。

2-2. 分類と一般的特徴

世紀転換期の観念論の特徴は、論者ごとに大きく異なる。また“idealism”という語が濫用されがちであり、その意味が曖昧で混乱を招くという不満は、当の観念論者たちからも出ていた (Creighton [1920], Seth [1920] 191, Brightman [1920] 535)。

とりわけ問題を複雑にするのは、この時期の“idealism”と呼ばれる立場が大きく二つに分けられることである。一方には、実在や知識について精神的存在の優位を主張する立場がある。これは「認識論的観念論」と呼ばれうる (実際、新実在論者からはそのように呼ばれた)。他方で、理想およびその担い手である人格が究極的実在性を持つとする立場も、同じく“idealism”と呼ばれた。これには「理想主義」という訳語が適切であろう¹¹⁾。

こうした二面性のうち、本論文の主題である観念論から実在論への推移において問題となるのは、前者の認識論的観念論である。第3節で論じられるように、アメリカ哲学において実在論に取って代わられたのは、この意味での観念論である¹²⁾。

さて、認識論的観念論にはおおよそ三つの特徴が見出される。第一に、観念論は19世紀の自然科学の発展によって勢いづいた唯物論に対抗し、何らかの精神的存在者の地位を擁護する (Campbell [2006] 103-104)。より積極的には、精神ないし意識の根本的な実在性を主張する。

たとえばオーモンドは次のように述べる。「意識そのものは実在的であって、物理的なものの単なる随伴現象ではない」。これは、世界を解釈

するための真の基礎としてまずもって受け入れられるべき事柄である。しかるに、意識の実在性はごく手短に証明できる。

他のあらゆる実在的事物が実在的であるということがひとえにそれに対してのみであるところのもの〔＝意識〕がそれ自身非実在的であるとすれば、他のあらゆるものの明白な実在性は幻とになってしまうからである。したがって、いやしくも何らかのものが実在的であるためには、意識が実在的でなければならない。繰り返すが、もし実在的なものが意識に対してのみ実在的であるならば、意識はそれ自身実在的であるだけでなく、実在性の基準をも与えるのである。(Ormond [1906] 12)¹³⁾

ただし、観念論における「精神」や「意識」の捉え方は論者ごとにヴァリエーションがある。個別の認識主観と捉える者もいるし、普遍的かつ絶対的な精神を措定したり、道徳的主体としての個人的人格を第一義と見なしたりする場合もある。

第二の特徴として、原子論への反対が挙げられる。シリーによれば、米国の観念論者に共通するのは、「英国の連合主義の特徴である原子論的な扱いに反対して、精神および知識の有機的な捉え方に重点を置くことである」(Thilly [1914] 549)。クレイトンも同じく、観念論を「原子論的実在論——客観的世界が存在者の単なる寄せ集めであり、それ自体は意味を持たないとする立場——に対立するものと捉える (Creighton [1917] 516)。

第三の特徴は、観念論者の哲学観である。彼らによれば、哲学とは体系的知識の学である。いいかえれば、特殊諸科学の前提を批判し、多様な分野の知見を完全な世界観へと昇華、統一し、真理の総体の根拠および原理を探究する学問が哲学なのである (Tunstall [2014] 34-35)。たとえばオーモ

ンドは次のように述べる。実在の本性を十全に解明するには、自然科学だけでは足りない。なぜなら自然科学には、調査対象の内的な本性から離れてしまうような態度——「科学の態度の外在性」——が本質的に備わっているからである。それゆえ、実在の探求には別の出発点が必要となり、それは「意識そのものの内部にある」(Ormond [1906] 11)。意識に立脚するこうした哲学は、「自然科学と形而上学の両方の帰結を組織化する総合を提供することで、その調停役〔mediating office〕を果たさなければならない」(Ormond [1906] 17)。ここで言われる「総合」とは、諸学問の成果を、その原理にまでさかのぼって基礎づけ、根本的に統一できるように組織化する方法である(Ormond [1906] xxx, 5)。こうして哲学は、「真理の総体の統一性および全体的な意味を見据えつつ、その総体の根拠および原理を調査することをみずからの特別な課題とするような学問分野」(Ormond [1906] 3)なのである。

このように観念論においては、哲学は諸学を有機的に統合し基礎づけることを主要課題とするので、実在の単なる記述や個々の哲学的問題の解決作業——これは新実在論の哲学観でもある——とは異なる。

2-3. 個別的概観

【クレイトンの場合】

クレイトンは「観念論」を、もっぱら認識論的立場を指す語として用いる。そのうえで、自身の立場をボザンケに倣って「思弁的観念論」と呼び、主観的な心的状態を偏重するパークリーの心理主義的観念論(「精神主義〔mentalism〕」)¹⁴⁾から区別する。

クレイトンによれば、精神主義は経験を受動的で不活発な観念の秩序、あるいは心理的な存在の個別形態へと還元し、能動の実体としての精神と鋭く対比させる(Creighton [1917] 517)。これに対して、思弁的観念論はこ

うした二元論を拒否する。

〔一方に〕精神と呼ばれる実体があり，〔他方に〕精神との有機的関係をまったく持たない自然と呼ばれる別の実体があると仮定する代わりに，思弁的観念論は経験に基づいて，これらの実在同士が分割されたり対立させられたりしておらず，まさにその存在および本質において関係し補完しあうものであると仮定する。(Creighton [1917] 522)

認識対象としての自然は，精神による一方的な働きかけを受けるだけの存在ではない。それはむしろ，受動的な観念の秩序以上の自立性を持ち，精神との能動的交流を持つのである。

「可知性〔knowability〕」とは事物に備わる真の特徴であって，事物に対する外的な偶有性などではないということは許容されるように思われる。知るということが精神の本性であるならば，同様に，知られるということは事物の本性なのであって，それゆえ，私たちが自然と呼ぶ秩序は，この関係から離れては十全なものにならないのである。(Creighton [1917] 523)

いいかえれば，「事物は，その具体性において，つねに何らかの秩序の構成員として現われる」(Creighton [1917] 527)。このように，クレイトンは対象と精神の一方向的な関係を拒否し，両者の有機的，相互的關係を強調する。無限かつ絶対的な精神は有限なものに内在し，世界のなかでみずからを顕現する。ようするに，精神は物理的なもののなかに備わっているのである (Kuklick [2001] 113, 邦訳164)。

【ボウンの場合】

他の観念論者と同様に、ボウンも認識対象の存在を意識に依存させるが、その意識を絶対的なものとは捉えない。むしろ、「絶対的思考が事物の源であり原因であるという見解は不完全である」(Bowne [1897] 302) と述べる。誰のものでもない思考それ自体などというものは、個々の人格の生きた活動から抽象されたものにすぎない。思考へのいかなる参照も、最終的には理性的行為者としての人格への参照を必要とする。かりに事物を絶対的思考——「大文字の思考」や「大文字の意識」——に関係づけたところで、私たち人間の認識にまつわる問題は未解決のままだし、有限な思考と無限な思考との架橋不可能な二元論もそのまま残る。絶対的観念論は、私たちの有限な経験における思考と存在の関係を、絶対的思考における思考と存在の関係と混同しているにすぎない。

こうしてボウンは、一方でカントを踏襲し、世界は統覚によって統一され規定されるという意味で主観的だと考える。実在の構成に用いられる思考のカテゴリー——存在、因果関係、統一性、同一性など——は、たんに知性の形式が知性を超えて投影されたものにすぎず、知性から離れれば理解も存在もできない。実在は精神の外にあるのではなく、思考の世界にほかならない。このように考えることによってのみ、世界は定義されうるもの、理解されうるものになる。つまり、「精神は唯一の存在論的実在」(Bowne [1898] 423) なのである。

他方でボウンは、ただひとつの有限な精神だけが存在するという主観的独我論にも、世界が個々の主観に相対的なものであるという懐疑論的立場にも与しない。複数の人格が存在することと、客観的世界の同一性が悟性の作用を通じて実現されることとは、ともに疑うことのできない前提だからである (Bowne [1897] 281)。つまり、ボウンはパークリーが用意したあらゆる精神に共通な対象というものを認めることで、認識の普遍性を確保

しようとしたのである (Kuklick [2001] 112-15, 邦訳163-66)。自身のこうした立場を、ボウンは「カント化されたバークリー主義 [Kantianized Berkeleyanism]」と呼ぶ。

歴史的には、私の立場はカント化されたバークリー主義と表現されるかもしれないし、それ自体では現象主義と呼ばれるかもしれない。外界が現象的な実在しか持たないということを示すからである。また、この立場は客観的観念論と呼ばれるかもしれない。対象が個別的主観からは独立していることを強調するからである。この立場は観念論である。精神の外にある存在をすべて否定し、客観的経験の世界を、知性から離れては意味も可能性も持たないような思考の世界にするからである。(Bowne [1898] 423)

【ハウィソンの場合】

ハウィソンは、主著『進化の限界——人格的観念論の形而上学理論の素描』(1901)の序文において、歴史上の観念論が一元論——一にして全である普遍的精神が万物を含み、支え、規定する立場——に執着してきたことを批判する。そのうえで、ボウンと同様にみずからの観念論を「人格的」と形容する。

観念論とは、精神が唯一の主要な、あるいは絶対的な実在であるという学説ではないのか——だから、観念論は必ずしも人格が事物の中心的な源であるという主張ではないことにならないか。〔批判者はこのように尋ねるかもしれない。〕それではなぜ、この〔人格的という〕接頭語が必要なのか。答えはこうである。哲学的思想の実際の歴史が示すのは、理性的意識が第一原理であるという見解が哲学において得

られたあとも、完全な人格性を事物の中心に置こうという動きに特異な停止が見られるということである。歴史上の観念論は、実際、人格的であることから程遠いものであり、むしろ圧倒的に非人格的なのである。(Howison [1901] viii)

それとは反対に、以下の論考全体の目的は、掛け値なしに完全に人格的である観念論的体系を提示し、それを何としても強化することである。本書の論考が提唱するのは多元論であって、いかなる一元論でもない。すなわち、そこで支持されるのは、すべてを予見する単一の精神——これのみが真に自由な行為者性を持つ——ではなく、人格的な自発性、つまり真の自己方向づけ〔self-direction〕を持つ多くの精神からなる永遠の世界、形而上学的な世界なのである。(Howison [1901] x-xi)

ただし、ハウィソンが提唱する多元論は、野蛮な個人主義や相対主義、「無政府主義的な多元論」(Howison [1901] xi)¹⁵⁾ではない。個々の人格には普遍性も備わっているからである。

すべての現実的精神が有する観点は、永遠の全体性のなかにある精神が断然そうであるのと同じように、絶対的に公共的かつ普遍的である。〔…〕そのような公共的かつ普遍的な観点は、あらゆる精神のなかに潜在していなければならない。(Howison [1901] xi-xii)¹⁶⁾

3. 世紀転換期の実在論

20世紀に入ると、こうした観念論の支配に対する批判が本格化する。本

節では、観念論と鋭く対立した实在論的立場を扱う。

3-1. 分類

観念論が多様であるのと同様に、世紀転換期の实在論も多岐にわたるが、認識の問題をめぐる立場についておおむね以下の四つ——常識的实在論、表象的实在論、新实在論、批判的实在論——に区別できる。

常識的实在論は、知覚されるものがそのまま客観的实在としても存在すると見なす立場で、哲学を知らない市井の人の素朴な態度とされる¹⁷⁾。しかし、知覚には錯覚や誤謬がつきものであり、これをどのように説明するか、また、知覚されるものが人によって異なるという相対性をどのように扱うかにおいて困難に陥るとされる。

表象的实在論は、通常の知覚および感覚の世界の外部に、真に实在的な世界を設ける立場である。この立場のもとでは、私たちの知覚経験は主観的であると同時に客観的实在を表象するものであると見なされる¹⁸⁾。こうした立場は「二元論的实在論」(Montague [1912])とも呼ばれ、認識不可能な物自体を措定することによって空虚な不可知論に陥るとして、観念論および实在論の双方から槍玉に挙げられた¹⁹⁾。

第三に、新实在論は、精神が対象を構成するという観念論も、主観と対象のあいだに媒介物を設ける表象的实在論もともに批判し、常識的实在論の真理に立ち戻る。すなわち、实在は知ることから独立に存在しているが、同時に、まさにその实在が経験において直接現前すると考えるのが新实在論である。その詳細は3-3において論じる。

最後が批判的实在論である。新实在論が認識対象の直接的現前を認め、知覚経験と知覚される対象とが数的に同一であるという認識論的一元論をとるのに対して、批判的实在論は認識論的二元論を採用し、直接与えらるる一般的本性——「本質」——と、それが指示する超越的「存在」とを区

別し、両者を数的に別個のものとした (De Waal [2001] xxxiii-xxxiv)²⁰⁾。彼らの成果は『批判的実在論論集——知識の問題に関する協同的研究』(1920)に結実した。

3-2. 観念論との争点

ここでは、観念論ととりわけ鋭く対立した新実在論の立場を中心的に扱う。新実在論者の批判の矛先は、認識対象が認識主観(精神)に依存すると主張する認識論的観念論に向けられた²¹⁾。批判の主要な論点は、新実在論が「自我中心的状況設定」と呼ぶものと、関係の捉え方の二点である。

第一の「自我中心的状況設定 [Ego-centric Predicament]」とは、新実在論が認識論的観念論の主要原理と目したものである。ペリーは1910年の論文でこの原理には正当性が欠けていると論じた (Perry [1910a], [1910b], [1910c])。それによれば、自我中心的状況設定の本領は、「認識されていないいかなるものも見出されえない」(Perry [1910b] 21)ということ、いいかえれば、認識対象と認識主観の不可分性を主張することに存する。つまり、この設定はもともと認識論的な場面に関するものである。しかし、観念論はこの設定を不当に拡張し、対象の存在へも適用する。すなわち観念論は、認識されていないものは認識されていないという(トートロジカルな)設定に基づいて、認識されていないものは存在できないとも主張するのである²²⁾。ここで明瞭に示されているのは、存在と認識の不当な同一視という認識論的観念論の欠陥と、この同一視が必然的なものではなく、両者の分離が可能だとする新実在論の姿勢である²³⁾。

第二の論点は、いわゆる外的関係および内的関係をめぐるものである。一方の外的関係とは、関係項の本性に基礎を持たない偶然的ないし恣意的な関係、いいかえれば複数の項が互いに影響を与えあわない関係である。これに対して内的関係は、関係項の本性にに基づき、みずからの内的構造に

よって結合している必然的な関係、いいかえればこの関係が変わると項そのものも数的に別個なものになるような関係であり、関係項を関係項たらしめ、関係項が何であるかを決定するものである²⁴⁾。観念論は、関係が対象にとって内的だと主張し、認識対象が主観との認識関係から独立して存在することを認めない。他方、新實在論は、認識関係を対象にとって外的なものとし、精神の認識作用の有無にかかわらず、対象はそれ自体で實在性を有すると考える。このように、認識における外的関係の擁護は、対象の独立を主張する新實在論にとって決定的に重要な論点であった（この点は3-3でも論じる）。

3-3. 新實在論の立場

新實在論の概要は、1910年に連名で発表された論文、「六人の實在論者による計画趣意書および最初の綱領」で述べられている²⁵⁾。この論文は哲学界の注目をとおいに集め、盛んに論評が加えられたので、観念論と實在論の論争はますます過熱した²⁶⁾。

「綱領」論文は、哲学の悲惨な現状とそれに対する改革の方向性を述べた序論部（PFP 393-94）と、各論者が一節ずつ担当し、おのおのが新實在論の基本テーゼと考えるものを列挙する六つの節（PFP 394-401）とで構成されている。

まず序論部では、哲学に対して向けられてきた非難——非科学的で主観的だから各人が勝手なことを言い合っているだけだ——の原因が、言葉の用法の不統一と研究における協同作業の欠如とにあると述べられる。そこで、そのような汚名を返上し、哲学における進歩を実現するためには、以下の三段階からなる協同作業が必要であるとされる。第一に、基礎となる原理を明示し、第二に、この原理によって基礎づけられた方法に従って作業の計画を立て、最後に、作業に従事する探究者たちが同意できる公理、

方法、仮説、事実の体系を得ることである。新実在論の目標は、こうした協同作業によって、「共通の技法と共通の用語法、その結果として最終的には、自然科学が持つ権威のある程度を享受できるだろう共通の学説を發展させること」(PFP 394)であった。

序論部に続いて6名が述べる新実在論の基本テーゼは、以下の三点にまとめられる (De Waal [2001] xix-xxviii, Hildebrand [2003] ch. 2, 加賀 [2009] 137-39)。

ひとつめは、認識対象に関する実在論である。観念論が、事物の存在および本性を、知られることによって規定するのに対して、新実在論は、認識対象が認識主観および認識関係から独立した存在と本性を持つと主張する。いいかえれば新実在論は、観念論による存在と認識の不当な同一視を否定する²⁷⁾。

次に、直接的実在論ないし認識論的一元論が挙げられる。それによれば、実在するものと知覚されるものは数的に同一である。実在する対象は、表象や観念といった媒介物なしに、認識主観によって直接知られる。つまり、新実在論は、不可知の実在を要請する表象的実在論を否定するのである²⁸⁾。

第三に、3-2で述べた外的関係説が来る。認識関係は、認識対象の存在および本質に変更を加えない仕方に対象と主観を結合する。これによって、第一と第二のテーゼは両立可能となる。かりに関係が内的であるとすれば、関係項は当の関係から外れた場合、その本質が変わるため数的に別個のものになる。これを認識の場面に適用すれば、対象は、主観との直接的な知る／知られる関係に入ったり、そこから外れたりすることで、数的に別の存在者になってしまうということである。これでは実在論は成り立たない。したがって、認識対象の独立性を保ちながら (第一のテーゼ)、表象的実在論が含意する二元論や不可知論をも避ける (第二のテーゼ) ため

には、認識関係を対象にとって非本質的なものと見なす外的関係説を採用する必要がある²⁹⁾。

3-4. 新實在論の影響とその後

新實在論者は、「綱領」論文の二年後（1912）に、彼らの運動の集大成として『新實在論——哲学における協同的研究』を公にした。ここでは、「綱領」論文で提唱されたように、哲学の諸問題が分業体制を取って扱われた³⁰⁾。

また、この論文集の出版直前には、自然主義、観念論、プラグマティズムといった主要な学派を概括的に論じ、それらに代わるべき立場としての實在論を詳述したペリーの『現在の哲学的諸傾向』（Perry [1912]）や、マーヴィン『はじめての形而上学』（Marvin [1912]）といった著作が公刊され、数年後にはホルト『意識の概念』（Holt [1914]）およびスポールディング『新合理論』（Spaulding [1918]）も出された。こうして、新實在論運動は成熟の域に達した（De Waal [2001] xiii, xxxi-xxxii）。

他方、實在論のこうした興隆のなかで、観念論は衰退していった。1914年に第一次世界大戦が勃発すると、米国では反ドイツ感情が強まり、ドイツ哲学を積極的に取り入れた観念論（とりわけロイス哲学）への風当たりが強まった——ロイス自身はドイツの帝国主義を批判していたにもかかわらず。しかもロイスは、新實在論者からの批判へ十分に応答しないまま、1916年にこの世を去ってしまう。こうして、観念論の隆盛の時期は終わることとなった。

ところが、新實在論の理論的困難もすぐに明るみに出た。それは誤謬と錯覚の説明であり、新實在論をめぐる議論においてとりわけ注目を集めたものである。たとえば、まっすぐな棒を水のなかに入れると、光の屈折が変わり曲がって見える。このとき、新實在論に即せば、曲がって見える棒

と実在するまっすぐな棒とは数的に同一であることになる。なぜなら、上述のように、新実在論の立場は、独立した不可知の実体とその表象としての知覚という二元論ではなく、実在する対象の直接的現前を主張する認識論的一元論だからである。しかし、まっすぐな棒が同時に曲がった棒でもあるというのは明白な矛盾である。新実在論はこうした事例をいかにして合理的に説明するのか。

新実在論における理論的支柱を担ったホルトは、認識論的一元論を貫徹するため、「存立〔subsistence〕」という領域を導入した³¹⁾。この領域においては、知覚可能なものや思考可能なものはすべて同等の地位にある。あらゆる知覚は、意識のなかや頭の内部ではなく、それが現われて見えるまさにそこに存立する中性的な素材なのである。

では、錯覚と正しい知覚はどのように区別されるのか。ホルトはその区別を、存立するもの同士の組織化の違いによって説明する。組織化によって、中性的な素材のあるグループのあいだに時間的および空間的關係が生じ、あるグループはたんに存立するだけでなく「存在〔exist〕」もすることになる³²⁾。こうして、棒そのものは数的に同一のまま存立し、一方の知覚グループ——曲がった棒——が存在という地位を獲得できないのに対して、まっすぐな棒の知覚グループは特定の組織化を経て、時空間内に存在することになる。

このようにホルトは、意識／外界という二分法に代えて、存立／存在（存立の下位区分）という二分法を設けた。いわば外界を二層に分けたのである。錯覚や正しい知覚というのも、畢竟、存立するもののなかの区別を表すにすぎない。

しかし、この議論はうまくいっているのだろうか。かりに存立するものが数的に同一のままでも、組織化の違いによって複数の側面——存立するだけの曲がった知覚という側面と、存在できるようになっ

たまっすぐな知覚という側面——を持つのであれば、結局のところ、存立するものとその側面という二元論——表象的实在論に酷似した——に後戻りしているのではないか。

こうした疑問のゆえに、別の新实在論者モンタギューはホルトの存立の世界を拒否し、代案として知覚を二種類に分ける。それによれば、一方に存在する事物を直接与える知覚があり、他方に時空間的位置づけを持たずただ存立するものだけで一致する知覚があるというのである。

だが、知覚のこのような区別はいかにして可能なか。新实在論が批判する表象的实在論において、外界の対象を正確に写す知覚と、そうでない誤った知覚とを区別することが原理的に困難だったのとまったく同様に、モンタギューの立場もまた、知覚の区別を十分に説明できないのである(De Waal [2001] xxxiii, Kuklick [2001] 205-207, 邦訳297-300)。

結局、新实在論者たちは各自の見解を統合することができず、「同胞殺しの議論」(Kuklick [2001] 207, 邦訳300)をおこなった³³⁾ 挙句、約束された協同研究も発展させられないまま、1920年代以降離散してしまった。こうして、その盛期は約10年と短かったが、新实在論はその後のアメリカ哲学の实在論的な特徴を準備したと言える。

さらに、新实在論運動の動機と背景は、この時期の哲学を理解するうえで重要である。20世紀初頭、物理学や化学、生物学などの諸科学は目覚ましい進歩を遂げていたし、実験を用いて心を計量的に扱う自然科学としての心理学も成立した³⁴⁾。こうした成功とは対照的に、アカデミックな哲学は危機に瀕していた。哲学は、意見の不一致と空疎な議論ばかりだという悪評にまみれ、どうでもよい分野になりかけていた³⁵⁾。

このような状況のなかで、新实在論者たちは、学問分野としての存続をかけ、哲学を自然科学に近づけることを目指した。そのためには、自然科学を外から基礎づけようとする大仰な観念論的哲学ではなく、实在論に基

づいた個別科学を範とすべきであり、科学者たちと同様の協同的探求が不可欠である。観念論があらゆる学問の基礎として偏重する認識論は、じつは根本的な分野などではなく、諸科学の成果に大きく依存している。新実在論は、科学の成果と接点を持たない哲学は不毛だと主張し、認識論を科学の一分野として定位することを目指した (De Waal [2001] xx-xxiii)。彼らは、哲学の自然科学化という試みによって哲学を救おうとしたのである。

4. プラグマティズムの位置づけ

それでは、本論文で素描されたアメリカ哲学における観念論から実在論への変遷のなかに、古典的プラグマティズムはどのように位置づけられるだろうか³⁶⁾。

まず確認すべき点は、世紀転換期のアメリカ哲学の代表的立場であるプラグマティズムは、観念論と実在論とともに、三つ巴の戦いを繰り広げていたということである (Campbell [2006] ch. 7)。三者の主要な相違のひとつは、実在をどのようなものとして捉えるかという点にある。第2節で見たように、認識論的観念論は、実在を何らかの精神的存在者の作用に従属するものと規定する。実在のあり方も、実在があるということさえも、精神抜きには考えられない。他方でプラグマティズムが強調するのは、実在の可塑性 (plasticity) である。プラグマティズムによれば、実在のあり方は——その存在そのものは精神に依存しないとはいえ——それ自体で確定済みのものではない。それは、部分的には私たちの目的や関心といった精神的なものに基づいて作り上げられるもの——「なお形成中のもの [*still in the making*」] (James [1975] 123, 邦訳258) ——である³⁷⁾。つまり、プラグマティズムにおける実在とは、未来においてどのような事態が生じるかということの決定に、私たちが参与することを許すような世界である (Smith [1983] 60, 邦訳87)。反対から言えば、私たちは、自分の関心や目的という楔

をこの世界に打ち込むことで、そこに対比や強弱、明暗を作り出すのである。

このような精神の能動性の強調と、その精神によって規定されることを待つ改変可能な実在という見方は、プラグマティズムを観念論へと接近させる。実際、ロイスは『現代観念論講義』³⁸⁾のなかでジェイムズのプラグマティズムをカントの影響下にある経験論的観念論と見なしている (Royce [1919] 235)³⁹⁾。

新実在論は、プラグマティズムのまさにこうした点を批判する。ペリーは、プラグマティズムが実在を人間精神に従属させる点に観念論と共通の特徴を見出し、以下のように述べる。

ようするにプラグマティズムは、その独断的な擬人論、実践的信念の立場を本能的ないし恣意的に採用すること——これはまさに観念論の中心的動機である——から離れてはいないのである。(Perry [1912] 39)⁴⁰⁾

他方で新実在論は、こうした擬人論的実在観に反対し、プラグマティズムよりもいっそう徹底した仕方で観念論から離脱する⁴¹⁾。新実在論が実在のあり方を見極めるために用いるのは、分析という手法である。実在が分析される際、観念論やプラグマティズムであれば、実在そのものに改変や新たな特徴の付加がおこなわれると考えるのに対して、新実在論は、実在そのものに変化はなく、ただ実在の要素が発見されるにすぎないと考える⁴²⁾。これは、新実在論が、実在全体もその部分も、分析の前後において不変であるという外的関係説に基づいているからである。

5. 今後の課題

本論文では、世紀転換期のアメリカ哲学について、観念論から実在論への思潮の移行という点に着目し、その内実を明らかにした。しかしながら、この時期のアメリカ哲学における最大の観念論者であるロイスをほとんど扱うことができなかった。ロイス哲学の本格的な検討を欠いたままで世紀転換期のアメリカ哲学を十分に理解することはできない。今後は、その主著『世界と個』を中心にロイスの観念論を吟味することが必要である。

また、新実在論からの批判に対して、ロイスがどのように応答したかについても、調査の余地がある。ロイスは、実在論からの批判に対して、公刊された論文や著作において応答することはほとんどなかったが、1910年以降の講義や演習などで自説を擁護していた (De Waal [2001] xvi, Tunstall [2014] 37)。そのなかでは、新実在論者が槍玉に挙げる自我中心的状況設定が自身の観念論の枢要な原理ではないこと、むしろ、パースの影響を多分に受けた解釈共同体という発想に基づく社会的アプローチを重視する、共同体主義的観念論が自身の立場であることが論じられている。その内実を最晩年の講義ノート (Royce [1998]) に基づき検討し、ロイスの観念論の最終的な形態を解明することが必要である。

注

- 1) 1910年は、ボウン (4月) とジェイムズ (8月) が相次いでこの世を去ったという点でも象徴的である。さらに1916年にはロイス (9月) とハウイソン (12月) も死去しており、観念論の時代は終わろうとしていた。
- 2) この時期の観念論と実在論について論じた邦語文献には、たとえば以下のものがある。植田 [1941]、大島 [1943]、タウンSEND [1951]、ローバック [1956]、ホワイト [1982] 第9, 10章、ミード [1994] 下巻第15章、竹尾 [1997] 167-72、ミサック [2019] 上巻第5章、松岡 [2019]。しかし、これらは入手困

難であるか、または記述がきわめて限定的である。ただし、加賀 [2009] 第 II 部第 2, 3 章および第 III 部第 2 章は、20 世紀初頭の観念論および実在論をデューイ哲学との関連において論じたものとして大変貴重である。

- 3) この時期は、いわゆる分析哲学の成立に深く関わる二つの出来事と重なり合う。すなわち、アリストテレス以来の伝統的論理学に代わる新しい論理学を提示したフレーゲ『概念記法』(1879)の登場から、いわゆる言語論的転回をしるしづけたウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』(1921)の公刊までの時期である。本論文が扱う観念論および実在論は、こうした現代哲学の大きな転換の影に隠れて、ほとんど注目されてこなかった。
- 4) これは19世紀中葉までのアメリカ哲学の主流を形成した立場である。ハーヴァードのボーエン (Francis Bowen, 1811-90) やニュージャージー・カレッジ (のちのプリンストン) のマコッシュ (James McCosh, 1811-94)、イェールのポーター (Noah Porter, 1811-92) といった人物が代表的であり、彼らは理性と信仰の一致を示すという思弁的な問題を主に探求していた。詳しくは以下を見よ。Kuklick [2001] ch. 4.
- 5) Josiah Royce, W. T. Harris, J. Watson, G. T. Ladd, G. H. Howison, A. T. Ormond, B. P. Bowne, J. E. Creighton, J. G. Hibben, E. Albee, Mary W. Calkins, R. M. Wenley, H. Gardiner, C. A. Strong, J. H. Tufts, A. K. Rogers, C. M. Bakewell, A. O. Lovejoy, J. A. Leighton, W. E. Hocking. 批判的実在論者であるストロングやロジャーズ、ラヴジョイが含まれていることは注意に値する。
- 6) Elisha Mulford, G. H. Howison, George Morris, G. T. Ladd, Borden P. Bowne, Jacob G. Schurman, George S. Fullerton, James Seth, J. E. Creighton.
- 7) George Holmes Howison (1834-1916): マリエッタ・カレッジを卒業後、会衆派の神学校でも学んだ。その後、セントルイス・ヘーゲル主義者の影響を受けながら『精神現象学』などを読んだ。カリフォルニア大学バークレー校に哲学部を創設し、米国で最初期の哲学的組織のひとつである Philosophical Union を設立した (1889)。人格的観念論を提唱し、ボウン、ジェイムズ、ロイスらに影響を与えた。
- 8) Borden Parker Bowne (1847-1910): ボストン大学の哲学教授 (1876-1910) として人格的観念論を支持し、機械論的決定論や実証主義に抗して自由と自己の重要性を強調した。ロツェからの影響を強く受け、ボストン人格主義と呼ばれる哲学的運動の主導者となった。
- 9) Alexander Thomas Ormond (1847-1915): ニュージャージー・カレッジで PhD を得たあと (1890)、短期間ミネソタ大学で教え、その後1883年にプリンストン大学の「精神科学と論理学のステュアート・プロフェッサー」。

1898年には「哲学のマコッシュ・プロフェッサー」となり、同地で1913年まで権勢をふるった。APA 第二代会長も務めた（1902-1903）。

- 10) James Edwin Creighton (1861-1924) : ダルハウジー・カレッジを出たあと、ライプツィヒとベルリンで学び（1888）、帰国後 PhD を取得した（1892）。コーネル大学で「論理学と形而上学のセージ・プロフェッサー」に選出され（1895）、1914年から23年まで大学院の長を務めるなど手腕を発揮したが、そのせいで自身の研究に十分な時間を割くことができなかった。*Philosophical Review* の編集や、*Kant-Studien* のアメリカ人編者として学界に君臨し、APA 創設（1901）に携わり、初代会長も務めた（1902）。
- 11) “idealism” のこうした二面性を明確に指摘したのは、ボウンが立ち上げたボストン人格主義の一翼を担ったブライトマン（Edgar Sheffield Brightman, 1884-1953）である。ブライトマンは当時の観念論を四つの型に分類する（Brightman [1920] 536-39）。

1. プラトン型：価値の客観性を強調する（ボザンケ、A・セスなど）。

2. パークリー型：実在は意識ないし精神の本性のうちにあると主張する。「精神主義」とも呼ばれる（ヒューム、ミル、カント、フィヒテなど）。

3. 新ヘーゲル主義型：真理と価値の客観性を主張し、絶対者による価値と存在を統一した有機的体系（すべてが内的に関係しあう一元論的宇宙）を提示する。「絶対的観念論」とか「思弁的哲学」とも呼ばれる（ブラッドリー、ボザンケ、クレイトンなど）。

4. ロツツェ型：自己ないし人格が究極の事実であると考え、1-3の立場が、有限の自己を究極の実在において超越されるべきものと見なすのに対して、4は自己を実在および道徳の根本と見なすので、人格的観念論とも呼ばれる（ロツツェ、グリーン、ボウンなど）。

本論文に即して言えば、1と4は“idealism”の理想主義的側面を、2と3は認識論的側面を表す。ブライトマンは、こうした二面性を含みこむ仕方、観念論に対する以下のような一般の定義を与える。「観念論を特徴づけるものは、精神（最も広い意味における）の究極の実在ないし宇宙的意義に対する信念、あるいは、精神によって明らかにされ尊重されるところの価値の究極的実在ないし宇宙的意義に対する信念である」（Brightman [1920] 539, 下線強調は引用者）。

しかし、ブライトマン自身も不完全だと認めているとおり、この規定は適用範囲が広すぎてあまり役に立たない。実際、定義後半の「価値の究極的実在」に関しては、ペリーやスポールディングのような新実在論者も同様の主張をするため、ブライトマンは彼らも“idealist”のなかに数え入れて

しまう。こうした不備があるとはいえ、この時期の観念論に認識論および価値論の二側面があったことを明確に指摘した点は重要である。

- 12) これに対して、理想主義としての“idealism”がどのような変遷を辿ったのかは、アメリカ哲学における価値論の系譜という大きな論点に関わるものであり、今後の調査を待たなければならない。
- 13) またボウンは、实在論と対比させながら観念論を以下のように規定する。「いま私たちがこれら〔観念論〕の諸形態に共通する要素を探すならば、私たちが物質的事物およびその全体系と呼ぶものは、精神および意識に対してのみ、かつそれに関連してのみ存在するという主張のなかに見出すことができる。他方で、实在論的な主張は、事物は物質的要素や物体として、あるいは少なくともある種の非人格的な实在として、精神の外に、あるいは精神から離れて、なおかつ精神および意識に対立するものとしてそれ自体で存在するというものである」(Bowne [1897] 319, 下線強調は引用者)。
- 14) 先に紹介したブライトマンは、この語をシジウィック (Henry Sidgwick, 1838-1900) と A・セス (Andrew Seth Pringle-Pattison, 1856-1931) が用いたものとして紹介している。セスによれば、シジウィックは死後出版された *Philosophy, its Scope and Relations* (London: Macmillan Company, 1902, 60-62) において、「精神主義」を、感覚主義者と観念論者（これは純然たる精神主義者と呼ばれる）を含むだけでなく、現象主義者や相対主義者——彼らは、精神から独立した物質の存在を否定しないけれども、そのような物質に関するいかなる知識も不可能だと主張する——をも含むものとして用いた (Seth [1920] 191n 1)。そのうえでセスは、パークリーの観念論や、それを修正して全知者 (All-Knower) を持ち出す理論を指すための用語として、「精神主義——故シジウィック教授に由来するように思われる呼称——という呼び名は、観念論という濫用されているばかりか多くの意味を持つ言葉 [the overdriven and many-coloured term] よりもふさわしいと思われる」と述べている (Seth [1920] 191)。
- 15) このような立場の代表者として、ハウィソンは、W・ジェイムズとポーランドの哲学者ルトスラフスキ (Wincenty Lutosławski, 1863-1954) を挙げる。後者は古代哲学の研究においても著名であり、プラトンの対話篇の執筆年代を確定するための統計的分析などで功績を挙げた。
- 16) このような人格——創造者から（作用因的な関係においては）独立し、自由に自己活動をおこなう有限な人格——からなる世界を、ハウィソンは「神の国」と呼ぶ。多くの人格は「みずからの道徳的な实在を相互に認識しあうことで、すべての出来事とすべての単なる「事物」とを規定する基礎

となり、永遠の（すなわち留保なく実在的な）世界を形成する。古来より使われてきた適切な比喩を使えば、こうした精神は「神の国」を構成すると言えるかもしれない。ここでは、すべての成員は、ひとつの理性的理想を達成するという共通目的にひとしく属している。そして神は、あらゆる精神の成就された型〔fulfilled Type〕であり、諸精神の統合の生きた絆であるから、力の行使によってではなく、ひとえに光によって、また権威によってではなく理性によって、作用因によってではなく目的因によって——換言すれば、もっぱらあらゆる精神の非人格化された理想〔impersonated Ideal〕であることによって——その国に君臨するのである」（Howison [1901] xiii-xiv, cf. Clenndening 202-203）。

- 17) この立場は「粗雑実在論〔Crude Realism〕」（Spencer [1873] 494）とか「自然的実在論」（Montague [1912]）とも呼ばれる。
- 18) この立場の代表はデカルトやロックであるが、世紀転換期の実在論者にとってより馴染みのある人物はスペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）であろう。彼は自身の実在論を「変容実在論〔Transfigured Realism〕」と呼び、常識的実在論から区別した。「私たちがコミットしている実在論は、客観的存在を主観的存在とは別個に、また主観的存在から独立したものとして端的に主張する。しかし、この実在論は、客観的存在のいかなる様態も、それが現われるとおりに実際に存在するとは主張しないし、その様態間のつながりが、それが客観的に現われるとおりに存在するとも主張しない。こうして、この実在論は粗雑実在論からおおいに区別され、その区別を際立たせるために、変容実在論といみじくも呼ばれるかもしれない」（Spencer [1873] 494）。
- 19) たとえば以下を見よ。Bowne [1897] 322, Howison [1901], Montague [1912]. ロイスは『世界と個』第1巻第2, 3講において、このタイプの実在論を徹底的に批判した。
- 20) この立場は以下の7名によって提唱された。

ストロング（Charles Augustus Strong, 1862-1940）：ドイツの各地およびハーヴァードで学び、シカゴ大学で心理学実験室の設立（1893）に携わったあと、コロンビア大学で教えた。

サンタヤナ（George Santayana, 1863-1952）：ハーヴァードでPhDを取得し（1889）、同大学で1889年から1912年まで教えた。その後米国を去り、ヨーロッパで独自の思想を展開した。

ロジャーズ（Arthur Kenyon Rogers, 1868-1936）：シカゴ大学でPhDを取得し（1898）、ミズーリ大学などに勤めたあと、1914年から20年まで

イエール大学で教えた。その後は大学から身を引き、研究と著述に専念した。

ラヴジョイ (Arthur Oncken Lovejoy, 1873-1962) : ハーヴァードで MA を取得したあと (1897), 1910年から38年までジョンズ・ホプキンズ大学で教えた。

プラット (James Bissett Pratt, 1875-1944) : ドイツ留学を経てハーヴァードで PhD を取得し (1905), 1905年から43年までウィリアムズ・カレッジで教えた。

ドレイク (Durant Drake, 1878-1933) : ハーヴァードで学んだあとコロンビア大学で PhD を取得し (1911), 1915年からヴァッサー・カレッジで教えた。

セラーズ (Roy Wood Sellars, 1880-1973) : ミシガン大学で PhD を取得し (1908), 同大学で40年以上にわたって教えた。ウィルフリッド (Wilfrid Stalker Sellars, 1912-89) は彼の息子である。

批判的實在論の特徴については、ドレイクの以下の記述が参考になる。「批判的實在論によれば、対象についての私たちの断片的経験は、外的な實在世界の一部ではなく、私たちの経験に対して本当に外的で、私たちの経験のなかにはけっして入ってこないような同質的世界の、私たちの意識ないし経験における断片の像である。物理科学のもろもろの結論は、たしかに私たちの経験の観点から表現されるが、しかし、人間の意識的経験の本当の環境である物自体の世界について象徴的には妥当する。この学説は、私たちの狭い経験領域を取り囲む実在的で単純な同質的外界を信じるという要求——「自然的」實在論〔新實在論〕はそれに応えることができず、観念論はそれを満たそうとしないが、すべての人が感じているところの要求——に応えるものである」(Drake [1911] 372, 下線強調は引用者)。

すなわち、批判的實在論は経験と外的世界とを区別する。とはいえ、これは単なる表象的實在論への回帰ではない。表象的實在論は、知覚対象を諸性質の集まりと捉え、これを精神の内側に据えるので、知覚対象は主観と客観を遮断するヴェールになる。また、新實在論も知覚対象を性質の集まりと見なし、しかもこれを外的実在と同一視するために、誤謬の問題を解くことができない。これに対して批判的實在論は、知覚される対象があくまで外的実在であって、性質の集まりではないと主張する。性質の集まりは対象を知覚する際の手段にすぎない。たとえば過去の出来事は、過ぎ去ったものである以上私たちの経験から独立した存在である。この過去の出来事を私たちが知る時、その手段は記憶に現われた性質の集まりであ

る。いいかえれば、性質の集まりは知覚の対象ではなく、予期されうる経験を知らせるしるしなのである。こうして批判的実在論は、存在論的には一元論でありながら、認識論的には二元論を採用したのである (Kuklick [2001] 209-10, 邦訳303-304, 加賀 [2009] 125-26)。

- 21) ペリーは観念論の要点を次のように規定する。観念論は根本的に知識の理論に基づいている。「すべてのものは第一義的には「対象」であり、対象であるということは、必然的に何かに「対して」あるということであり、ある意味では「主観」の表現や創造物であることを意味する」(Perry [1912] 113)。こうして、外界は精神が持つ知識に還元される。「認知的意識の優越性の主張、すなわち存在が認知的意識の知る作用に依存しているという主張は、まさに観念論の主要原理であると見なすことができる」(Perry [1912] 114)。ペリーによれば、こうした原理を奉じ、「物理的秩序と精神的秩序の両方を超越し包み込む、知る精神 [a knowing mind] への依拠」(Perry [1912] 148)を自身の理論の中心に据える点で、「普遍的精神」や「認識主観一般」を持ち出す客観的観念論も、個別の心理学的精神に固執するパークリーの主観的観念論も同じ穴の貉である。
- 22) 同様の批判はモンタギューにも見られる。彼によれば、観念論者は自明な事柄と馬鹿げた事柄とを混同している。「自明な事柄とは、私たちは、対象が知られているときにだけ、その対象が存在することを知らることができるということである。馬鹿げた事柄とは、対象は、知られているときにだけ存在しようということをも私たちが知っているということである」(PFP 396)。このように、観念論の見かけの説得力は、前者と後者を不当に同一視することに由来するものである。
- 23) 自我中心的状況設定への批判は、ムーアの「観念論論駁」の主要な論点や、ジェームズによる「観念論の論理」に対する批判にも通じるものである。Moore [1903], James [1977] ch. 5, 大塚 [2019] を見よ。
- 24) こうした区別は、ジェームズやブラッドリーをはじめ、ジョアキム、ボザンケ、エヤーなど、当時の英米の哲学者たちに広く共有されていた (Mander [1994] 97, Ferreira [1999] 109-10, Basile [2014] 195, 大塚 [2019])。
- 25) 「綱領」論文の詳細な内容と意義および新実在論者6名の略歴については、大塚 [2021] を見よ。なお、新実在論の実際の誕生は1890年代であり、主導者たちがまだジェームズやロイスによって深く影響されていた院生のころである (De Waal [2001] xiii)。また、新実在論による公式の観念論批判の始まりは1902年であると考えられる。この年、ペリーとモンタギューはそれぞれの論文において (Perry [1902], Montague [1902])、ロイスが『世界

と個』において展開した表象的 (representational) 実在論への批判に応答し、対象が直接与えられるとする現時的 (presentational) 実在論を擁護した (De Waal [2001] xv-xvi, Tunstall [2014] 35-36)。

- 26) 世紀転換期の観念論と実在論の論争の多くは、*Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods* 誌上でおこなわれた (De Waal ed. [2001] には、こうした応酬の主要なものが取められている)。これはコロンビア大学のウッドブリッジ (Frederick James Eugene Woodbridge, 1867-1940) とブッシュ (Wendell Ter Bush, 1866-1941)——2名とも実在論者である——によって1904年に創刊された専門雑誌で、実在論への強い傾向を持っており、それより以前 (1892) に創刊されていた *Philosophical Review* の観念論的傾向に対抗した。

ウッドブリッジは創刊号のなかでこの雑誌の意義と特色を述べている。「ドイツにはほぼすべての科学について研究機関誌というものがあり、医学や工学などの応用科学については、どの国にも「業界誌」がある。しかし、科学的哲学、心理学、倫理学、論理学の全領域を網羅し、頻繁に刊行され、すべての専門職的な研究者の興味に直接訴えかけるようなジャーナルは存在していない。現代において重要なことは、哲学と心理学の関係は親密でありつづけるべきだということ、また、特殊科学の基本的な方法と概念——これはいまやあらゆる方面で注目されている——は、哲学が歴史的に発展する際には哲学と連結されるべきだということである」(Woodbridge [1904] 27-28, 下線強調は引用者)。

本誌は1904年の第1巻から1920年の第17巻まで、隔週で毎年26号ずつ発行された (毎号の分量は30頁弱で、複数の論文および書評が掲載された)。価格は各号15セント (通年購読3ドル) で、最終巻となった第17巻のみ各号20セント (通年購読4ドル) だった。

- 27) たとえばホルトは、対象や事実といった「存在者の存在 [being] と本性は、こうした存在者が知られることによってはいかなる意味でも条件づけられることがない」(PFP 394) と述べ、またマーヴィンは、「論理学、数学、物理学、その他多くの科学で研究される存在者は、心的という語のいかなる固有の意味ないし通常の意味においても心的ではない」(PFP 395) と述べる。新実在論はこのように、認識から独立して存在する事物を端的に認める。
- 28) この点について、たとえばベリーは、「意識の対象ないし内容が何らかの存在者であるのは、それが反射神経システムによって示される特定の仕方
- で別の存在者によって反応されている限りにおいてである。こうして、た

- たとえば物理的自然は、ある状況のもとでは、意識において直接現前する」(PFP 397) と述べる。
- 29) この点についてモンタギューは、「知られる事物は、それが知られていないときも変容されずに存在しつづけることができる。あるいは事物は、みずからの実在性を損なうことなく、認知関係に入ったり、そこから外れたりすることができる。換言すれば、事物の存在は、誰かがそれを経験する、知覚する、考える、何らかの仕方意識するという事実に関連したり依存したりするものではない」(PFP 396) と述べる。またピトキンは、「ひとつの項は、みずからに対する、あるいはほかの項に対するその他の関係すべてを変化させずに、いくつかの項に対するいくつかの関係を変化させることができる」(PFP 399) と述べる。両者ともに、認識関係によっては対象が変化を被らないとする外的関係の立場を述べている。
- 30) マーヴィンが形而上学と認識論の関係、バリーが対象の独立性に関する実在論的理論の展開、スポールディングが分析という方法論、モンタギューが誤謬の問題、ホルトが錯覚の問題、ピトキンが生物学的用語による行為および認知の実在論的分析をそれぞれ担当した。
- 31) 「存立」は、認識主観の作用に依存しない領域を指すものであり、米国の新実在論に限らず、グリーンやラッセルなども使用した概念である(大島 [1943] 288-91)。
- 32) 存立するものの組織化の詳細を検討することは別稿に譲る。
- 33) 実際、『新実在論』末尾の「付録」では、モンタギューによるホルト論、ホルトによるモンタギュー論、ピトキンによるモンタギューおよびホルト論が収められ、新実在論者同士の相互批判がおこなわれている。
- 34) 19世紀における自然科学としての心理学の成立と哲学との関係については以下を見よ。Reed [1997]。
- 35) 哲学が置かれたこうした状況に対する危機感は、新実在論者のあいだだけでなく、観念論者(たとえばクレイトンなど)のあいだでも広く共有されていた(De Waal [2001] xxvii-xxviii, cf. Cohen [1910])。
- 36) 本論文ではパースのプラグマティズム(プラグマティシズム)は扱わない。パースは独自のプラグマティズムを発展させたが、アカデミックな地位を築くことに失敗し、存命中その影響力はきわめて限定的なものに留まったからである。世紀転換期にプラグマティズムと言え、もっぱらジェイムズやデューイ、あるいは英国のシラー(Ferdinand Canning Scott Schiller, 1864-1937)のものであった。
- 37) ジェイムズは次のように言う。「実在のあれ [実在が存在するということ]

は実在そのものに属している。しかし、その何であるか〔実在がどのようなかということ〕はそのどれであるかにかかっており、そしてそのどれであるかは私たちに依存している」(James [1975] 118, 邦訳245)。

- 38) これはロイスの死後に出版されたもので、カント以後の哲学の歴史的基礎や論理的起源、動機が詳細に述べられている。ロイスが、当時ドイツにおいても本格的な研究が始まったばかりであった『精神現象学』にヘーゲル哲学の核心を見出している点は、世紀転換期のアメリカ哲学におけるドイツ受容という観点からも注目に値する。
- 39) また、ククリックも、この時期のプラグマティズムを「観念論の一形態」と呼び、世紀転換期の観念論と連続的に位置づけている (Kuklick [2001] 95, 邦訳139, cf. 109, 邦訳159, 大塚 [2020])。
- 40) ペリーがこうした「プラグマティスト」として名前を挙げるのはベルクソンである (Perry [1912] 40n1)。
- 41) ペリーは、主観的 (= 観念論的) なプラグマティズムと客観的 (= 実在論的) なそれとを区別し、シラーやベルクソンに代表される前者を批判する。他方で、後者をジェイムズに代表させ、自説に近いものとして好意的に論じる。さらに別の箇所では、ベルクソンの主知主義批判に同調した晩年のジェイムズを、実在論的な方向へ修正しようとしている (Perry [1912] 241)。こうした解釈は、ジェイムズ哲学をみずからの実在論の先駆として位置づけようとするペリーの戦略の一環と見なしうる。
- 42) 『新実在論』において分析を論じたスポールディングは以下のように述べる。「実在論者は分析というものを、少なくとも大多数の場合、分析や発見から独立に存在ないし存立する要素や部分を全体のなかに発見することであると見なす」(Holt *et. al.* [1912] 159)。

参考文献

- Adams, George P. & Montague, William P. eds. [1930] *Contemporary American Philosophy: Personal Statements*. 2 volumes. New York: Macmillan Company.
- Basile, Pierfrancesco. [2014] “Bradley’s Metaphysics,” in Mander, ed. [2014] *British Philosophy in the Nineteenth Century*, 189–208.
- Bowne, Borden P. [1897] *Theory of Thought and Knowledge*. New York, Cincinnati, Chicago: American Book Company.
- [1898] *Metaphysics*, revised edition. New York, Cincinnati, Chicago: American Book Company.
- Brightman, Edgar Sheffield. [1920] “Modern Idealism,” *The Journal of Philosophy*,

- Psychology and Scientific Methods*, Vol. 17, No. 20, 533–50.
- Campbell, James. [2006] *A Thoughtful Profession: The Early Years of the American Philosophical Association*. Chicago: Open Court Press.
- Cledenning, John. [1999] *The Life and Thought of Josiah Royce*, revised and expanded edition. Nashville: Vanderbilt University Press.
- Cohen, Morris Raphael. [1910] “The Conception of Philosophy in Recent Discussion,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 7, No. 15, 401–10.
- Creighton, James E. [1917] “Two Types of Idealism,” *The Philosophical Review*, Vol. 26, No. 5, 514–36.
- [1920] “Philosophy as the Art of Affixing Labels,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 17, No. 9, 225–33.
- [1921] *An Introductory Logic*, 4th edition. New York: Macmillan Company.
- De Waal, Cornelis. [2001] “Introduction” to *American New Realism 1910–1920*, Vol. 1. Bristol: Thoemmes Press, xiii–xxxv.
- ed. [2001] *American New Realism 1910–1920*. 3 volumes. Bristol: Thoemmes Press.
- Drake, Durant. [1911] “The Inadequacy of “Natural” Realism,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 8, No. 14, 365–72.
- Drake, Durant, Lovejoy, Arthur O., Pratt, James B., Rogers, Arthur K., Santayana, George & Strong, Charles A. [1920] *Essays in Critical Realism: A Co-operative Study of the Problem of Knowledge*. London: Macmillan Company.
- Ferreira, Phillip. [1999] *Bradley and the Structure of Knowledge*. Albany, New York: State University of New York Press.
- Hildebrand, David. [2003] *Beyond Realism and Antirealism: John Dewey and the Neopragmatists*, Kindle edition. Vanderbilt University Press.
- Holt, Edwin B. [1914] *The Concept of Consciousness*. New York: Macmillan Company.
- Holt, Edwin B., Marvin, Walter T., Montague, W. P., Perry, Ralph B., Pitkin, Walter B. & Spaulding, Edward G. [1910] “The Program and First Platform of Six Realists,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 7, No. 15, 393–401. (大塚 [2021]) [FFP と略記]
- [1912] *The New Realism: Cooperative Studies in Philosophy*. New York: Macmillan Company.
- Howison, George. H. [1901] *The Limits of Evolution, and Other Essays, Illustrating the Metaphysical Theory of Personal Idealism*. New York: Macmillan Company.

- James, William. [1975] *Pragmatism*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
 (『プラグマティズム』 榎田啓三郎訳, 岩波文庫, 1957年/2010年改版)
- [1977] *A Pluralistic Universe*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
 (『ウィリアム・ジェイムズ著作集6 多元的宇宙』 吉田夏彦訳, 日本教文社, 1961年)
- Kuklick, Bruce. [1977] *The Rise of American Philosophy: Cambridge, Massachusetts, 1860–1930*. New Haven: Yale University Press.
- [2001] *A History of Philosophy in America 1720–2000*. New York: Oxford University Press. (『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』 大厩諒+入江哲朗+岩下弘史+岸本智典訳, 勁草書房, 2020年)
- Mander, W. J. [1994] *An Introduction to Bradley's Metaphysics*. Oxford: Clarendon Press.
- Mander, W. J. ed. [2014] *The Oxford Handbook of British Philosophy in The Nineteenth Century*. Oxford: Oxford University Press.
- Marvin, Walter T. [1912] *A First Book in Metaphysics*. New York: Macmillan Company.
- Montague, William. P. [1902] “Professor Royce’s Refutation of Realism,” *The Philosophical Review*, Vol. 11, No. 1, 43–55.
- [1912] “The New Realism and the Old,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 9, No. 2, 39–46.
- [1940] *The Ways of things: A Philosophy of Knowledge, Nature, and Value*. New York: Prentice-Hall.
- Moore, G. E. [1903] “The Refutation of Idealism,” *Mind*, New Series, Vol. 12, No. 48, 433–53. (『観念論の論駁』 国嶋一則訳, 勁草書房, 1960年, 105–52頁)
- Ormond, Alexander T. [1906] *Concepts of Philosophy*. New York: Macmillan Company.
- Parker, Kelly A. & Bell, Jason, eds. [2014] *The Relevance of Royce*. New York: Fordham University Press.
- Perry, Ralph Barton. [1902] “PROF. ROYCE’S REFUTATION OF REALISM AND PLURALISM,” *The Monist*, Vol. 12, No. 3, 446–58.
- [1910a] “The Ego-centric Predicament,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 7, No. 1, 5–14.
- [1910b] “Realism as a Polemic and Program of Reform,” *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 7, No. 13, 337–53 & Vol. 7, No. 14, 365–79; reprint, De Waal, ed. [2001] *American Realism 1910–1920*, Vol.

- 1, 19-49.
- [1910c] “The Cardinal Principle of Idealism,” *Mind*, New Series, Vol. 19, No. 75, 322-36.
- [1912] *Present Philosophical Tendencies: A Critical Survey of Naturalism, Idealism, Pragmatism and Realism Together with A Synopsis of the Philosophy of William James*. London, New York: Longmans, Green & Co..
- [1930] “Realism in Retrospect,” in Adams & Montague, eds. [1930] *Contemporary American Philosophy*, Vol. 2, 187-209.
- Reed, Edward S. [1997] *From Soul to Mind: The Emergence of Psychology, from Erasmus Darwin to William James*. New Haven: Yale University Press. (『魂から心へ——心理学の誕生』村田純一 + 染谷昌義 + 鈴木貴之訳, 講談社学術文庫, 2020年)
- Royce, Josiah. [1900-1901] *The World and the Individual*. 2 volumes. New York: Macmillan Company.
- [1919] *Lectures on Modern Idealism*, edited by Jacob Loewenberg. New Haven: Yale University Press.
- [1998] *Metaphysics*, edited by William Ernest Hocking, Richard Hocking & Frank Oppenheim. New York: State University of New York Press.
- Royce, Josiah, Le Conte, Joseph, Howison, G. H. & Mezes, Sydney Edward. [1898] *The Conception of God: A Philosophical Discussion Concerning the Nature of the Divine Idea As a Demonstrable Reality*. New York: Macmillan Company.
- Sabine, George H. [1917] “Philosophical and Scientific Specialization,” *The Philosophical Review*, Vol. 26, No. 1, 16-27.
- Schneider, Herbert W. [1963] *A History of American Philosophy*, 2nd ed. New York: Columbia University Press.
- Seth, Andrew, Pringle-Pattison. [1920] *The idea of God in the light of Recent Philosophy*. New York: Oxford University Press.
- Smith, John E. [1983] *The Spirit of American Philosophy*, revised edition. Albany: State Univ. of New York. (『アメリカ哲学の精神』松延慶二 + 野田修訳, 玉川大学出版部, 1980年)
- Spaulding, Edward G. [1918] *The New Rationalism; the Development of a Constructive Realism Upon the Basis of Modern Logic and Science, and Through the Criticism of Opposed Philosophical Systems*. New York: Henry Holt & Co..
- Spencer, Herbert. [1873] *The Principles of Psychology*, Vol. 2. New York: D. Appleton and Company.

- Thilly, Frank. [1914] *A History of Philosophy*. New York: Henry Holt & Co.
- Tunstall, Dwayne. [2014] "Goodbye, Idealist Consensus; Hello, New Realism!" in Parker & Bell, eds. [2014] *The Relevance of Royce*, 34-46.
- Woodbridge, Frederick J. E. [1904] "Notes and News," *The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*, Vol. 1, No. 1, 27-28.
- 植田清次 [1941] 『現代英米哲學』, 理想社
- 大島正徳 [1943] 『現代實在論の研究』, 至文堂
- 大塚諒 [2019] 「ジェイムズ哲学における関係概念——F・H・ブラッドリーとの論争を通して」, 『イギリス理想主義研究年報』第15号, イギリス理想主義学会, 11-21頁
- [2020] 「古典的プラグマティズム再考 共訳書紹介を兼ねて」, 『フィルカール』第5巻2号, ミュー, 140-53頁
- [2021] 「六人の實在論者による計画趣意書および最初の綱領」訳解, 『紀要 哲学』第63号, 中央大学文学部, 1-16頁
- 加賀裕郎 [2009] 『デューイ自然主義の生成と構造』, 晃洋書房
- 岸本智典編著, 入江哲朗+岩下弘史+大塚諒著 [2018] 『ウィリアム・ジェイムズのことば』, 教育評論社
- タウンSEND, H・G [1951] 『アメリカ哲學史』市井三郎訳, 岩波現代叢書
- 竹尾治一郎 [1997] 『分析哲学の発展』, 法政大学出版局
- ホワイト, モートン [1982] 『アメリカの科学と情念——アメリカ哲学思想史——』村井実+田中克佳+松本憲+池田久美子訳, 学文社
- 松岡健一郎 [2019] 「ジョサイア・ロイスの場合——古典的プラグマティズムとヘーゲル——」, 『ヘーゲル哲学研究』第25号, 日本ヘーゲル学会, 25-34頁
- ミード, G・H [1994] 『西洋近代思想史』下, 魚津郁夫+小柳正弘訳, 講談社学術文庫
- ミサック, シェリル [2019] 『プラグマティズムの歩き方』上下, 加藤隆文訳, 勁草書房
- ローバック, A・A [1956] 『アメリカ心理学史』上下, 堀川直義+南博訳, 法政大学出版局